

中大生の旅するチカラ

2

◇国際交流で広がる世界◇

人生観が培われる瞬間
それが大学時代の夏休み

間もなく長い夏休みがやってくる。帰省やアルバイト、運転免許の取得、なかには国家試験に向けて猛勉強、就職活動を予定する学生もいるだろう。大学時代の夏休みは、これまでの学生生活とは違い、長くて自由で、自分自身を耕せる貴重な時機だ。だから経験することのすべてが、その後の人生の「肥やし」になる。それに気づくのは社会に出てずっと後のことかもしれないが、それでも今を一生懸命やることで、自然とみえてくるものがあるだろう。

大学時代の夏休みは、筆者にとって人生観が培われた成長の瞬間でもあった。もちろん、それに気づいたのは何年も後のことで、社会に出て失敗



大学2年の夏にロサンゼルス語学研修へ(筆者右)

や挫折を繰り返した末である。休みのすべてを就職活動に費やし、とある企業に日参した夏もあった。しかし一番印象深かったのは、初めての海外、初めてのアメリカ、初めて臨んだ短期語学研修での夏だった。百貨店でアルバイトをして貯めたお金で一カ月の海外研修を申し込んだのは、大学のこの夏のこと

の夏だった。百貨店でアルバイトをして貯めたお金で一カ月の海外研修を申し込んだのは、大学のこの夏のこと



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。All About 旅行チャンネル案内役。日本旅行作家協会、日本観光研究学会等所属。著書に「JTB 旅をみがく現場力」(東洋経済新報社)など。

と。カリフォルニア州ロサンゼルス市郊外のオレンジ・カウンティでホームステイをした。観るもの聴くもの、すべてが新鮮で強烈なことの上な。ホストファミリーから「家の近くにゲイシャはいるか?」「チエコもローフィッシュ(刺身)を食べるのか?」という質問も飛び出して、仰天した。

しかし何より衝撃的だったのは、アメリカ人の生活様式でありライフスタイルだった。その夏、ハリウッドではステイブ・スピルバーグの映画がヒットを飛ばし、暮らしのなかにエンターテインメントが入りこんでいた。広いリビングには大型テレビ、アイランドがあるフルキッチンとダイニングテーブル。家族で団欒を囲むときにはキャンドルが焚かれ、週末にはモーターインのレストランで食事をする。休日ともなれば車で遠出をし



滞在中は友人のホストファミリー夫婦宅へも訪問

たり、ショッピングモールやドライブイン・シアターで映画を楽しんだ。全自動の洗濯乾燥機ひとつをとってしても感動する有り様で、まるでどこまでも続くフリーウェイのようにスピーディーで、メガ級で、合理的かつ先進的な印象を受けたものである。

当時、日本は先進諸国の仲間入りをすでに果たしていたが、暮らすのは「ウサギ小屋」程度と揶揄された。豊かさを追い求め、世界の先進各国にキャッチアップをしようとしてきた日本が、そう言われる所以がわかるような毎日だった。百聞は一見にしかずである。アメリカの財政は双子の赤

字（財政赤字と貿易赤字）に苛まされ、全米に退廃的な雰囲気は漂いはじめていた。そして帰国の翌月、ニューヨークでプラザ合意がなされ、一気に円高へと進んだことで、本格的な日本人海外旅行ブームが幕開けする。昭和六〇（一九八五）年のことである。

「出来ない自分」を変える 国際経済を学ぶきっかけに

ホストファミリーからの事前リクエストに因應するため、出発前には浴衣の着付けと和食の手料理を母から速習して旅立った。帯結びは何とかできたが、天ぷらはカラッと上手く揚げるのができなかった。そもそもアメリカの家庭に菜箸がないことに頭が至らず、仕方なし、大きなスプーンを



浴衣を自分で着付けたのは初めてのことがあった（筆者左）

片手に衣（ころも）と格闘した。それでもホストマザーは「デリシャス！」と言ってはくれたが、つくづく日本を知らない自分を知らされた。ボキャブラリーが足らず、辞書片手に会話した。しかし、これらの悔しさが帰国後の自分を変えた。英会話スクールへ通い、のちにタイピストの学校へも通った。就職してからは、仕事が終わるとすぐに会社近くの着付け教室と料理教室に通った。「出来ない自分」を変えることは、社会に出てからも続いたのである。

だが一番の財産は、国際情勢や経済に関心を持てたことである。帰国後すぐに、国際経済が専門の田中拓男先生（現・中央大学名誉教授）が主宰するゼミの門戸を叩いた。田中先生の門下生の中には海外を舞台に活躍する先輩も多く、刺激になった。毎日サークル活動に明け暮れて学問そっちのけだった自分が、入ゼミしたことによって卒業後の進路を真剣に考えるきっかけになった。今年の夏休みをいかに過ごすかは、あなた次第。人生に一度しかない今年の夏が、間もなくやってくる。

語学研修・海外留学・ホームステイ 異文化交流をひと夏の目標にする

海外での語学研修やホームステイを、今夏ないしは来夏、すでに予定している人もいるだろう。「海外留学」と銘打つものの中には、二週間



LA ホームステイ & 語学研修には、東京以外に名阪からも多くの大学生が参加した

一カ月程度の短いコースもある。すでに中学・高校時代に海外語学研修を経験したことのある人も、心身ともに成長した大学時代での味わい方には違いがあると聞く。休学ないしは交換留学生制度などで本格留学するのは濃度も異なるが、生涯の貴重な体験になることは間違いない。迷っているのであれば、ぜひ、ひと夏の目標に据えてほしい。

アメリカやイギリス、カナダ、オーストラリアが人気の地だが、近年ではフィリピンやマレーシアなどアジア諸国の英語圏、そして中国で語学を学ぶ人も珍しくない。物価が低いだけに、滞在コストや授業料を抑えることができるのがアジアの

魅力でもあ
るが、かつ
て日本がア
メリカに追
いつけ追い
越せだつた
ように、ア
ジアの国々
がまさに今
そのような
状況にある。
上昇志向の
よいエネル



米国フリーウェイをホストファミリーの車で疾走するも次々ホンダのバイクに抜かれた

ギーをもちょうことができる点にも、アジア人気の理由があるようだ。

滞在形態はまちまちだが、ホームステイは異文化交流の一番の近道だ。ホストファミリーの家に滞在して生活様式を知り、互いの文化を伝え合うことができるホームステイは、若いうちにこそ経験してもらいたい。またドミトリー（学生寮）なら、一定のプライバシーが保て、通学至便でリーズナブルな点で人気がある。ホテルやコンドミニアムに滞在しながら学校へ通うスタイルは、費用がかかるので学生には不向きといえ、社会に出てからの学びなおしで利用する人が多い。

語学学校を選ぶうえで気をつけたいのは、学生の国籍比率と学内ルールの二点が挙げられる。国

籍比率で日本人が多い場合、学内での母語の使用を禁止しているような厳しい規則を設ける学校なら語学の上達も早い。

ちなみに注意したいのは、留学斡旋（あつせん）会社の選び方だ。語学研修やホームステイを取り扱う会社のなかにはキャッチセールスマグの勧誘をするところもあり、親の同意がないまま契約して、のちにトラブルとなるケースが多い。留学斡旋業は、旅行業と違って消費者を保護する法律がないためグレーゾーンといわれ、悪徳ビジネスが横行しやすい。英会話学校のように高い授業料を前金で支払ったのに、突然、業者が倒産してしまふというケースも無いとはいえない。

そこで留意点をまとめた。（１）まずは信頼のおける斡旋業者を選ぶようにして、親の承諾を得ること。（２）出発日が決まったら、海外旅行保険や現地の私費保険などに加入すると同時に、保険が免責となる歯科の治療は早めに済ませ、持病や既往症がある人はトラベルカルテ（英文の診断書や処方箋）を携帯する。日本で使い慣れた市販薬（下痢止めや風邪薬等）は必ず持参する。（３）また、日本の伝統文化や歴史をおさらいしておく。宗教や政治、歴史認識などを話題にするときは注意を払い、あくまでも「郷に入りては、郷に従え」の精神で相手の国を敬うことを忘れずに。

国際交流で広がる世界、変わる自分を体感してほしい。